

旧約聖書を読んで感じること(21) ダン族のディブリの娘シュロミト



冒流者 William Blake

レビ記 24 章に、唐突に悲しい事件が記されています。それは一人の男が冒流の罪で石打の刑で殺されるという事件です。当人の名前は記されていないのですが、その男の母の名が、ダン族のディブリの娘シュロミトと、記されているのです。

シュロミトはエジプト人と結婚していました。すると息子は混血児ということでしょう。しかし宿営に暮らしていましたから、イスラエル共同体の一員です。その息子が宿営で生粋のイスラエル人と争い、主の御名を口にして冒流したため、モーセの元に連行されました。「冒流の言葉を聞いた者全員が手を男の頭に置いてから、共同体全体が彼を石で打ち殺す」というモーセの言葉通りに、彼は宿営の外で処刑されました。その後、シュロミトに何があったかは記されていません。

古代イスラエルは神権政治を行っていたのです。冒流の具体的な内容は不明です。宗教社会であると同時に、民族差別社会でもあったように思われてなりません。処刑された男は混血児で、争った男が生粋のイスラエル人と記されていることから、そのように思われます。またダン族はユダ族ベツアルエルの指導の下で、工芸の技術者として、臨在の幕屋、祭壇、祭具、祭服などの設計、意匠に関わった優秀な部族でした。(出 35:34) それゆえに混血児がその一族であることは妬みをかっただのかもしれない。人権を持つ現代から見れば、この事件はテロ、リンチと見なしていいものでしょう。

神や神聖なものを誹謗、中傷、讒言することが冒流です。日本には戦前天皇に対する「不敬罪」があって罰されました。国家宗教があったとしても、冒流罪を認めると、他宗教者、非国教者を殺したり、迫害したりするテロを正当化、許容することに利用されてしまいます。人間の場合は、誹謗、中傷、讒言すれば名誉棄損で訴えられますが、「冒流」の場合は、原告の神が出てこないのです。だからと言って、冒流していいということはありません。すべての人の思想、信仰の自由を尊重すべきです。

イエス様も「聖霊を冒流するものは永遠に赦されない」(マタイ 12:32、マルコ 3:29、ルカ 12:10)とっておられます。けれどもこれに対する罰則は言っておられません。あくまでも個人の魂の問題として言っておられるのです。ところが、イエス様は「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」といった言葉のゆえに、罪を赦すことができるのは神のみ、神を冒流する者として、神殿当局から付け狙われ、十字架で処刑されています。「いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません」と言った

ステファノも冒流者として石打で殺されました。



シュロミトの遺言

パルマ・フェルデマンヒル

イエス様の母マリアは幼子イエスを神殿に連れて行った時、信仰深い老シメオンによって祝福されますが、「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」という言葉も聞いていました。愛する息子を十字架というむごい刑で無惨に殺された母マリアの思いはどんなだったでしょう。同じように、シュロミトは息子を石打の刑で失い、耐え難い悲しみと嘆きを味わったと思います。母マリアの苦しみと同じ苦しみをシュロミトも味わっていて、胸が痛くなります。



ジョット